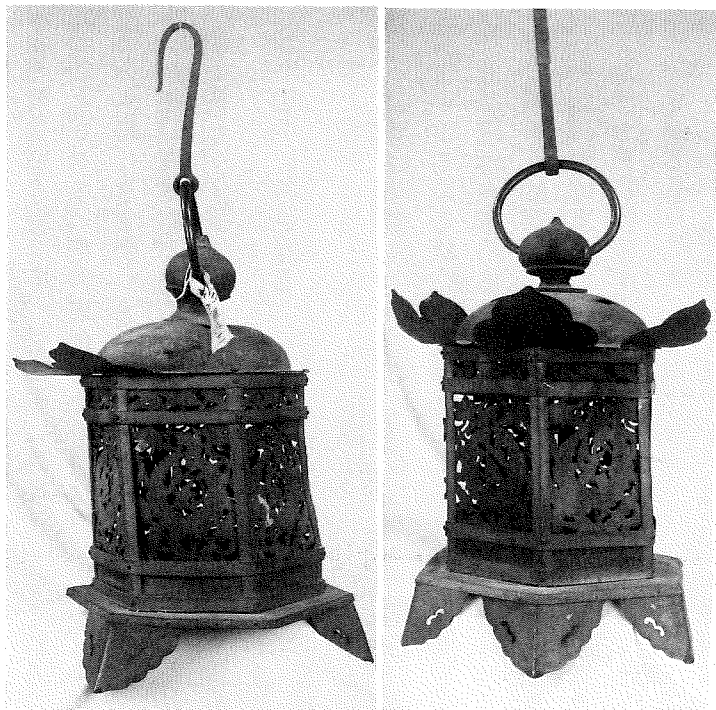


御嶽神社宝物シリーズ2 市指定有形文化財・釣燈籠

日本風俗史学会会員
齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会委員

徳川家康が慶長一〇年(一)と並行して、「武蔵国多西郡六〇五年)、三男秀忠に將軍 三田之内御嶽権現」の修覆を職を譲り、徳川氏の覇権確立 代官頭大久保石見守長安に命を宣し、同年と翌年一年に じたのである。この時、今ま江戸城の改築を行った。これ で南面していた社殿を東南の



二つの釣燈籠は、細部に意匠・手法のちがいがあがる。
向かって左の方に大久保長安の銘がある。—青梅市郷土博物館提供—

江戸に向けるようにしたと伝 柱三本に「大久保石見守頼」
える。徳川政権は御嶽を、そ 「奉寄進武州三竹蔵王権現」
の覇府江戸の鎮護の山と意識 「慶長十一年(十一月吉日)」と
していたわけである。

修覆竣工の年慶長十一年に、
総奉行大久保石見守長安は金
色燦然たる一対の釣燈籠を社
前に寄進した。鍛造された
銅板鍍金の燈籠の笠の宝珠の
鑲につけられた鉄の釣金具を
含めて総丈は約75cm前後。社
殿は壮麗なものであったのだ
ろう。六角の笠は蓮弁三片を
切り透かし、葵葉形の軒に三
つ盛りの火焰宝珠を蹴り彫り
にする。火袋は六面で、の
ぼり藤文(大久保家の家紋で
ある)を中央に、藤の枝葉を
唐草状に透かし彫りにし、正
面に両開きの扉を木瓜形の
蝶番で付ける。鍍金のよく
残る柱、長押は釘で止め、
頭長押飛長押の間は、藤唐草
の透かし彫り、腰長押と地長
押の間の板は格狭間に魚子地、
久保石見守長安の事跡を語る
三個の宝珠を蹴り彫りにする。
稀少で、貴重な史料でもある。

この一対の燈籠は基本的に
はほぼ同形同意匠だが、細部
は相違するところがあがり、一
対とすることは検討を要する。
しかし、この燈籠は、武蔵
御嶽神社(蔵王権現)が江戸時
代の初期に、徳川政権から、
特に重要視されていたことを
語る遺物である。また、武蔵
の山の根の地方の為政者とし
て、検地・町立・交通・殖産
に功績のあった地方巧者、大
稀少で、貴重な史料でもある。

武蔵御嶽神社行事

- 一月 一日 元日祭
- 一月 三日 太占祭
- 一月 十五日 真神祭
- 二月 三日 節分祭
- 二月 十一日 奉納俳句奉告祭
- 三月 八日 祈年祭(山開き)
- 四月 中旬 産安社例祭
- 四月 二十九日 奉納剣道大会
- 五月 八日 例大祭(日の出祭)
- 五月 十五日 奥の院例祭・真神祭
- 六月 十八日 雅楽と太々神楽一般公開
- 六月 三十日 太祓式(茅の輪くぐり)
- 九月 十五日 雅楽と太々神楽一般公開
- 九月 二十九日 流鏑馬祭・真神祭
- 十月 一日 太々神楽一般公開
- (第一日曜日) 開(大東京祭協賛)
- 十一月 五日 秋季大祭
- 十一月 二十三日 新嘗祭
- 十二月 三十一日 大祓式
- 毎月 八日 月次祭

御嶽神社の祭

九月二十九日、台風襲来を告げる、
はげしい風雨の中、本年も、夕刻をま
つて流鏑馬祭が執行された。

当神社の流鏑馬祭の歴史は大変古く、
武蔵名勝図会に、馬場遺跡のことが書
かれている。それによれば、現在ノナ
カと呼ばれる所で行なわれたであろう、
馬を疾駆させた雄壮な姿を想像させて
くれる。

この流鏑馬は、たそがれに行なわれ
る。これは、春の日の出祭(五月八日)
の陽祭に対して、この祭が陰祭として
位置づけられていたためで、やはり神
社の歴史の中の、神仏混淆のなごりが
ここにある。

この祭は、大変儀礼化され
たもので、祭事のあと、神社
の下の篝火のたかれた鳥居前
広場で行なわれる。騎手二名
が弓と矢を持ち、的諸役が、
竹に挟んだ的を掲げて立つ。
一方の騎手が、「ようござい

流鏑馬祭

ますか」他の騎手が「ようござい
ます」
「だします」、称へおわつて、斎場を
一周する。

さらに一周して矢を天空に放つ、「魔、
射たり」的諸役が「射たりをー」大
声を発しながら、掲げていた的を被い
落す。そして懐にいれていた木端を、
取りかこんでいる参列の人々に投げあ
たえる。木端は、もちろん的のかわり
である。この木端は、その日の夕食に、
魚を載せて食べる台にするのである。
そうすることによって、無病 息災を
神に感謝し、さらに末永いしあわせを
神に祈るのである。

